

者の思想の立場がすでに在るからである。

Berkeley, etc.: University of California Press,  
1987. 23cm, x+223pp.

L・E・イーストマン著

*Family, Fields, and Ancestors; Constancy  
and Change in China's Social and  
Economic History, 1550—1949.*

中村 哲夫

著者が序文で述べるように、本書はアメリカの大学の歴史學部における學部生用の教科書である。この種の書物を本誌のような専門誌で書評するのは、日本では異例のことと理解している。そういう理由と本書に對する評價にも考えるところがあつて、寄稿を辭退する豫定であつた。ところが、その矢先に斯界の氣鋭の學者が、本書を待望の名著のように扱う文章を發表された。評者が最も遺憾とするのは、本書の構成、理論上の特色、學說史のうえでの位置など紹介しないで、「日本人研究者が及びもつかない大膽な中國社會經濟史解釋」と激賞する態度である。事情に通じない日本の讀者に無用の誤解を與えかねないので、ここに公平な評を試みる。

著者 Lloyd E. Eastman は、中華民國史、とくに國民黨の南京政府の歴史研究で著名な學者である。邦文の書評も、入門書での業績紹介もあり、日本でも専門領域の重なる人々には周知の存在である。<sup>3)</sup>一九二九年の生れというから、本年で六一歳となるイリノイ大學の歴史學部の教授である。書肆より、一九九〇年一月に *The Nationalist Era in China, 1927—1949* とつう標題の新刊の編者がケンブリッジ大學出版より刊行豫定との報があつた。しかし、四

月以降と變更されたため、拙評の執筆には参照できなかった。著者の著述略目録を作成してみると、一連の業績は政治史學にはほぼ限られていることが解る。一九五九年に清佛戦争時代の廣東の排外運動を扱った論文を発表して以來、イーストマンは實に多くの著述を出している。本書にある種の堅實さが認められるのは、政治史學の分野で重ねられた研鑽を反映している部份である。この点につき、W・T・ロウエは書評論文のなかで、イーストマンの聲望は、清末から民國時期の政治史の再検討において堂々と樹立されたものである、と述べている。そのためであろうか、この社會經濟史の分野を論じた本書には、それなりの準備があった。すでに一九七四年に刊行されてゐる *The Abortive Revolution* のなかに本書の基礎が論述されている、けれども、ロウエの批評は、嚴格な審きをもつ。「不適確とはいえないが、社會經濟史の統合者とならうとすることに、彼は幾分か躊躇があるようだ」とか、あるいは、「彼自身の研究から根源的に引き出されたものではない」という。誤解を避けるため断つておくと、正しくは「彼自身の社會經濟史研究から根源的に」と言うべきである。卑見の及ぶ限りでは、イーストマンは、彼の政治史學のうえでの過去の業績を骨格とし、英語で發表された他者の社會經濟史の研究を攝取し、一つの體系として提示しようとしたのである。ロウエは、むしろ「否定的な面からみると、本書は新たな見方を殆んど提示していないと思われる。ナクイン S. Naquin とラウズキ E. S. Rawski の概説的で、比較し易い *Chinese Society in the Eighteenth Century* と、その點で不幸にも好對照をなしている」との皮肉混じりの批評を隠していない。

この皮肉をこめた評言は、主として本書の序文にある「近代初期

Early Modern period」という、西洋史學から借用された概念をどの時期の中國に適用するのかが、これをめぐるイーストマンと評者ロウエの見解の相違を反映している。著者イーストマンは、一八六〇年から一九四九年の中國の社會經濟は、從來の様態と比べ、あらゆる面での漸進的な變化がある、と主張する、ロウエは、それに對し一七〇〇年代に「近代初期」の概念を適用しようとする。そのため、ナクインとラウズキの共著への共感を隠さない。彼らの著作は、たいていの中國近代史の概説書が阿片戦争から敘述することへの知的な不満から、一八世紀を「近代初期」のなかでも最も躍動的な時代とする認識を具體的に展開したものである。第一部で清代の社會の事典的な解説を行ない、第二部で一八世紀の中國において生じた變化と中國社會の多様性を説明的に論じている。ロウエは、彼らの新著をやや過大に評價しているが、イーストマンの本書と比べると、彼らの知的な挑戦を支持する意義は理解できる。イーストマンは、阿片戦争後のウェスタン・インパクトから中國の近代化を説明しようとする、ありきたりな見方を繰り返しているにすぎない。ナクインとラウズキは、一八世紀に中國は自主的な力で、「近代初期」と稱することのできる段階へ達していたと見る。この假説が十分に論證できているかどうか、評者は最終的な斷定を避けるが、不可と評するのは酷と思われるし、假説の意義、新鮮さ、獨創力は、日本の學界でも評價すべし、という考えに達している。

イーストマンは、一八六〇年を劃期とし、一九四九年までを一つの時期と視る。洋務運動を起點として、「近代化」が始まるが、それは「初期」性のものであるという見方には、何らの新鮮さも無い。彼はアメリカの中國研究の主流を構成するハーヴァード學派の

堅實な學風を繼承している。この點だけを見ても堅實すぎる位なのであるが、あえて新味を求めると、一九四九年以降に「近代」を求める點にあるかも知れない。中華人民共和國の基層社會に残されている前近代の遺物に對し、あるいは、資本主義社會として確立した臺灣の基層社會に對しても、Constancyの概念で總合しようとするのは、今日、アメリカと日本とは、さして新しい發想でもない。結論部で、このような現代の中國人社會への批評がなされるが、その點で、いくつか共鳴すべきいくつかの短文を發見するのは容易である。けれども、アメリカの中國研究の理論性能の限界を知るものにとつては、本書のそれは初歩的で、臨界點の高みにも達していないことがわかる。

それでは、以下に各章を紹介しながら問題の所在を確認しておく。イーストマンは、第一章に「人口・成長と移住」を配置する。人口統計上の變化、人口成長に伴う食料資源の増産、移住と帝國の領土擴張、開拓者の經驗という四つの小節からなる。ナキンとラウズキは、彼らの共著の中心となる第二部で同じテーマの問題ととり組み、G・W・スキナーのマクロ・リージョン分析法を基礎に人口増加、經濟成長の地域的な多様性を検討している。例えば、一八世紀において、臺灣を一つのマクロ・リージョンに準ずる地域單位として設定している。これは、中國經濟を單系の成長過程、もしくは停滞としてみるのではなく、この時期の各マクロ・リージョンにおける人口増、市場町の増加、あるいは縣の新設などの面での成長率の多様性を論證しようとするためのものである。それに對し、イーストマンの敘述は、經濟學の教養を缺いた、平板なものである。彼が第一章で導く結論は、次のようなものである。開拓者が

移住先で經驗した政治、經濟的な實體は、「パーソナリティの特質」という意味での個人主義的發展に寄與しなかった」（一三、四頁）という。賢明な讀者ならば、ここでイーストマンが言う「近代」の意味と、それを生む意識の構造を察知することが容易であろう。ここでは、アメリカの開拓者精神との對比で語られていると察せられる。そのみならず、結論部で論ずる Constancyの核に、中國人のパーソナリティについての知見が再び登場する。人口史を論じて、パーソナリティ論へ歸結させる論法は、第二章にもみられる。そこでも個人主義に自明の價值を與えている。

第二章は、「中國社會における家族と個人」という、ガイド風の敘述である。小見出しを紹介してみる。家族、變りゆく婦人の地位、娘たちと子供、婦人と結婚、社會的な相互作用の内實、という五節からなる。本章の結論は、中國人の社會的行動の性格、つまりパーソナリティを、地位の上下、個人的關係、面子の三つを重視することに求める點にある。男女平等、自由な個人を基礎とする「近代社會」の理想像に對し、中國社會における男性優越主義の持續性（二四四頁）が強調される。彼自身の概念である Constancyとは、社會經濟史學の方法に則したのではなく、アメリカの政治史學が習俗のように用いるパーソナリティ論へ回歸していくものなのである。もし、經濟學に立脚し、第一、第二章のテーマを扱うとしたら、人口成長・移住との相關において展開された商業資本の社會統合體である幫と、清代においても再生されてくる宗法制家族に着眼しなくてはならない。著者がそういう經濟成長と社會組織の問題よりも、パーソナリティ論に歸結するのは、社會學、心理學に支えられた政治學に問題關心を働かせる方向でアメリカ流の知的活動の

ベクトルが作用しているからである。評者が著者のために惜むのは、Constancy と Change とを完全に區分する二分法の思考を克服してないことにある。中國社會の持續性と變容とは、實態を注意深く視るならば、二つの側面に分けることが出来ないほど、變容に支えられて持續性が生じるし、持續されて來た枠組に即して變容も生じることが判明する。著者の場合、變容を「近代化」、持續性を「傳統」とほぼ同義において、二分法的な思考で、歴史事象を肯定的な「近代化」、否定的な「傳統」というように、正か、負か、と判別を重ねていくのである。

そこで第三章であるが、著者は民俗信仰を扱っているが、それを單に Constancy を表象するものとしが見ようとしていない。すなわち、民俗信仰は、獨立した組織的な強さがない代りに、「中國社會のよく知られている保守性に寄與している」(五七頁)と述べる。けれども、城隍神信仰をとってみても、商業の發達に照應した時代から、逆に保守性に寄與した時代、さらには、郷紳の社會的地位の向上に關與した時代、あるいは民族主義の精神文化に資した時代もある。民俗信仰を Change と Constancy の二つの相が同一の事象のなかに不二の關係として貫かれていることを見落しているというより、著者の思考法の壁のために、中國の民俗信仰の方が眞の姿を見せてくれないのである。

したがって、Change に関する見方も、やはり單調になる。結論部で、中國社會停滯論を批判し、「中國は一八六〇年代に先立つ三百年餘りの間に、諸變化 Changes を經驗した。その諸變化は多方面で現われ、帝國の土臺と人々の生活を一變させた」(二四一頁)と言う。その原因は、人口成長と商業化の二つに求められている。

その限りでは著者の見方に同意するが、けれども、この Change に對し、改めて前述の Constancy を強調するので、最後の結論は傳統の持續性の再確認へと歸結する。この點をロウエは、停滯論を批判しているのに、「彼はまさに停滯論の見方を補強している」と鋭く衝く。評者からみると、商業化それ自體が Constancy であると同時に、Change である兩義性をもつ實相といえる。また人口成長も移住も、宗法制家族という Constancy の枠を通じた變化であり、生じた變化はまた持續性の強化をもたらすのである。このように、傳統と近代という術語には、所與の價值觀が内在している。

それに對し、持續と變化は、化學反應のような現象にも適用できる分析的な、つまり、客觀的な位相での術語である。イーストマンの穩健性が、低次の二分法と位相の混同とに支えられたものであることを見抜くのはさして困難な作業ではない。後に論ずるが、著者は非ハーヴァード學派の學者の業績を圖版を含めて引用、轉載し、公平なように見えるが、見えざる論理體系にまで讀解力が及んでいないのである。

第四章は、「農業・概觀」とあるように、基礎知識の紹介である。第五章は、「二〇世紀初頭の農業部門」を扱っている。ここでは、著者の農業經濟への一つの學派的な見方が明示されている。この章の副題は、「農民の窮乏化問題」とある。この窮乏化について、著者が「搾取」學派と命名する見方、つまりマルクス主義的觀點と、人口過剰とテクノロジーの初歩性に求める新マルクス主義の見方との雙方に對し、否定的な立場を表明する。では、イーストマンはどのような新しい見方を確立したのか。農民の窮乏化は一九三〇年代から始まったもので、それ以前には、そういう事實はな

い、と事實解釋の次元に話をもどしている。歴史家としては、當然の立論作業であるが、學派的レベルでの論争を期待していると、次元の違う單なる事實解釋を提示するだけである。批判された二つの學派の見方が、一九三〇年代に適合しないのは、世界恐慌の波及と日本帝國主義の侵略によるものである。けれども、恐慌と帝國主義侵略こそ「擲取」學派の主張の實證である。また、新マルサス主義を代表するM・エルビンの言う「高位均衡のワナ」というのは、一九三〇年代の窮乏を説明する理論として準備されたものではない。清代の人口と農業生産の關係を技術變化なき狀況のもとに設定する、一種の概念圖である。自説の展開に都合のよいところでは、エルビンを用いながら、他方で、彼の學説を紹介していない。新マルサス主義を批判する以上は、エルビンの「高位均衡のワナ」の概念をグラフを用いて示した圖を紹介するべきであらう。M・エルビンの示した成長限界に關する概念圖は、現代にまで及ぶ、中國農業經濟と商業化に關する、有用な概念圖なのである。われわれは、ともすれば著者が歐米の研究を公平に、かつ完全に理解していると思ひこみがちである。彼が「商業化」を變化の原因と指摘しながらも、その核にあたる農村定期市に關するスキナーの業績の紹介と利用法にも後述のごとく疑問が残る。第六章は、「王朝時代末期の商業・交易の手段と地理」と題する重要な部分である。運輸、度量衡、貨幣、銀行、定期市システム、八大地域、外國貿易と銀經濟、國家と商業・仲介業システムからなる。「中國の運輸システムは、一九世紀の末に西歐人が見出したところでは、複雑、非能率でコストの高いものだった」(一〇三頁)と述べる。一九世紀に限らず、外國人が傳統的運輸システムを抽出して觀察すれば、誰しもが同じ

結論に達する。しかし、一九世紀末を見るならば、汽船の運輸への參劃により、開港場都市間交通の發達、それに伴う交易・物流ルートの中で、沿海、内河交通に新たな活氣が生じていた。この新生面は、第八章で扱ひ、しかも「ウェスタン・インパクト」のもとの汽船と鐵道としてChangeの諸相としてのみ扱うのである。度量衡については、材料が全く不足しており、一頁強の敘述に終つてゐる。貨幣、銀行の項も、日本の研究からみて密度が薄い。定期市システムと八大地域は、G・W・スキナーの有名な業績の紹介である。けれども、傳統の持續と近代化に關するスキナーの壯大な理論を全く紹介していないのである。ここでは、W・クリスタラーに據つた六角形の作圖法を四川省に適用した事例研究のみを紹介している。また、運河の發達した地域では、この六角形のモデルは適合しない。ここでは、M・エルビンの、水路網の發達した地域の市場分布を取り上げた事例研究を紹介している。これは、エルビンの中國研究の支柱となる業績ではない。エルビンの傳統の持續と近代化に關する假説である「高位均衡のワナ」を全く紹介しないで、G・W・スキナーの作圖法の缺點を補ふ事例研究のみを高く評價する。更に、G・W・スキナーの八大地域區分を肯定的に紹介しているけれども、イーストマンがこれを地理學の手法としてしか紹介していないのは、スキナーの意圖と大きく反する。彼の理論を受容するなら、自立的な地域經濟單位として紹介し、軍閥據の社會經濟條件の一つとして活用すべきであらう。しかし、最近の研究では、八大地域の經濟自立性よりも相互依存を重くみる考えも生まれている。八大地域論を紹介するならば、まず提唱者の學説を深く理解し、また、そういう反論も含め異説も紹介すべきであらう。次の、外國貿

易と銀經濟の節は、陳腐な舊説の紹介に終つてゐる。英國と日本の金本位制に對する、中國の銀本位制の特色、對比すら試みられていない。それに比べると、「行政」の本質に仲介業システムを投影するのは新鮮である。けれども、これを貨幣と銀行の項よりも先の節で述べなかつたので、The brokerage concept of administration という巧みな表現が生きてこない。第六章のコンセプトが混雜してゐるので、節と節との論理關係が斷絶してゐる。ここでは、まず政府の形式的な管理の下にあるブローカーたちの、幫の經濟とも呼ぶべきものが、全國市場のネット・ワークと銀經濟の主役となつてゐる様態を活寫すべきであらう。

第七章は「王朝末期の製造業・産業革命に失敗したのか？」と題する。教科書であるがため、この問題を述べたのだらうか。「膨大な人口は、貧しいながらも増加しつづけ、それもまた労働力コストを繼續的に低下させるように作用した」(一五六頁)という常識論を述べてゐる。ここで、こう述べるならば、前述の新マルサス主義批判とは論理整合しない。この逆説的な人口増加のメカニズムは、むしろM・ユルピンの解釋が妥當である。本章では、日本との比較にも及ぶが、その知識水準はあまり高くない。

第八章の「ウェスタン・インパクトのもとでの商業と製造業」では、Changeに關する著者の年來の主張と、よく蒐集された素材に支えられ、敘述が生氣づく。節の小見出しを見ておく。外國貿易、銀行業、汽船と鐵道、外國企業、中國の所有する近代産業、戦時・戦後の産業界、工業の遺産、帝國主義のインパクト、という順に一八六〇年代からの變化を述べてゐる。本章の鍵をなす基本概念は、Modernizationである。中國の「近代化」は、日本に比べたら、遅

いが、巨大な傳統社會に近代技術が導入された場合に、當然に期待されるものには接近してゐる、と述べて本章を結ぶ。

もし、著者がG・W・スキナーのMarketing and Social Structure in Rural Chinaを深い洞察力で讀みとつていたら、こんな平板な解答に自己満足できなかったであらう。イーストマンが本章で述べた「近代化」は、スキナーの言ひ、中國都市の八ランクの上層の、開港場都市に生じた近代化なのである。輸送水準の低い、下位の三ランクの經濟中心地(市場地)では、特に最下位の標準市場町が増加して商業化が進行したと同時に、標準市場を核とする市場社會が傳統的な生産・交易・生活文化システムを再生させる、と説明してゐる。従つて、上位都市の「近代化」がもたらす、下位都市の「商業化」は、人口の大多數を占める鄉村部に活性化を刺激する一方で、土俗に精氣を吹きこむのである。このスキナーのマーケティング・システムから、傳統社會の再生メカニズムを解釋する方法は、依然として有效であらう。

第九章は、「近代初期の新しい社會階級」である。新しい社會階級とは、郷紳に基礎を置くCenturyに源流をみる。節を追うと、まず王朝末期の社會的エリートについて、主として張仲禮の業績に據つて述べる。次に新しいエリートと題して、新しい商人、知識人、軍人の三つの階級について述べてゐる。次に都市のプロレタリアート、政治的支配者たち、家族主義への挑戦、と論を進める。この章は著者の積年の研究そのものであり、政治史學者の眼が生きており、本書のなかで最も良質の部份である。

第一〇章は、「社會の陰」の面・秘密結社、無賴漢と反目」について述べる。いうまでもなく會黨に關する敘述である。前章の

「陽」の世界に對し、「陰」の世界を對照して、革命を論じている。多くの業績を引用するが、扱う對象が廣く、紙幅に適合していないから、散漫な感を強くする。革命黨が會黨を利用したことで、「傳統への反作用」をもたらしたと肯定的に觀るが、ここは、他方で會黨を利用したために、その傳統が政黨のなかで持續したという「反作用」も觀なければならぬ。いずれにせよ、第九、一〇章は社會史としては評價しうるが、經濟史の缺けた、いわば政治社會史に轉調した、著者の本來の土俵での勝負なのである。

最後に、持續と變化、と題する短い結章の部份がある。これについては、すでに述べたように、停滞論批判のレトリックのワナに自らから墮ちている、といえよう。研究には王道なし、と心すべきであるが、中國近世・近代の総合的な把握は、知的探求の對象としては容易ならぬものがある。著者が國民革命をライフ・ワークとして、その社會的、經濟的な背景と明清時代、民國時代を通過して、再解釋を試みるのは、大膽な知的挑戦といえる。けれども、ここで言う、「大膽な」とは、決して良い意味ではない。政治學の眼で歴史を觀る習慣から著者は脱皮していない。否、しようとしても出來なかつたのである。それは、自己の學派の限界なのである。經濟學の學理と人類學の學理から觀ようとする G・W・スキナーの長所や經濟學に根ざす新マルサス主義の魅力を學生には傳達しないで、アメリカの中國研究の主流に位置しつづけてやうとする、イーストマンの知識に對する意識的な横着さに對し、評者は好感はもてない。それほどばかりか、アメリカ人の大まかき、陽氣さが本文に顔を出している。たとえば、野球が普及しているところなのに、臺灣のある村では傳統的な火祭りの儀式が演じられている(二四四頁)との敘述

は、「近代」に關する彼の驚くべき價值觀を呈示している。アメリカの學者たちは、M・ウェーバーの中國研究の重厚さをまだ攝取できないで、アメリカ人の心性のままに語っている。

本書には、何の價值もないわけではない。英語文獻を檢索する小事典として觀れば、役に立つことも多い。しかし、中國近代史研究が國境を越えて、政治と學派の利害を超えて、客觀的な學術の世界に達するのは、遠い先のことのように感じられてならない。本書も深く讀めば、學派としての立場が見えてくる。教科書とは、本來そういうものなのかも知れない。

#### 註

(1) 本野英一「中國の現状を歴史學はどう説明するか——日米の近刊二書を中心に——」(『東方』第一〇七號 一九九〇年二月)。

(2) 久保亨「イーストマン『國民黨支配下の中國』」(『近きに在りて』第二號、一九八二年)、藤井正夫(山根幸夫編『中國史入門』下、第四二二頁)。

(c) The Kwangtung anti-foreign disturbances during the Sino-French War. *Papers on China*, no. 13, 1959.

。Ching-i and Chinese policy formation during the nineteenth century. *Journal of Asian Studies* vol. 24, no. 4, 1965.

。Throne and mandarins: China's search for a policy during the Sino-French controversy, 1880—1885. Harvard U. P., 1967.

- 。Political reformism in China before the Sino-Japanese War. *Journal of Asian Studies*, vol. 27, no. 4, 1968.
- 。Mao, Marx, and the future society, *Problems of Communism*, no. 18, 1969.
- 。Fascism in Kuomintang China: the Blue Shirts, *China Quarterly*, no. 49, 1972.
- 。Political conservatism in a revolutionary society, *American Behavioral Scientist*, vol. 17, no. 2, 1973.
- 。The abortive revolution: China under Nationalist rule, 1927—1937. Harvard U.P. (Harvard East Asian Series, 78), 1974.
- 。The Kuomintang in the 1930's. In Furth, Charlotte, ed. *The limits of change; essays on conservative alternatives in Republican China*. Harvard U.P., 1976.
- 。Regional politics and the central government: Yunnan and Chungking, In *Proceedings of the International Conference on rural development technology: an integrated approach*. June 21—24, 1977. Bangkok, 1977.
- 。The burgeoning but fragile state of Republican studies in Taiwan: report, *Chinese Republican Studies Newsletter*, vol. 4, no. 1, 1978.
- 。Facets of an ambivalent relationship: smuggling, puppets, and atrocities during the war, 1937—1945, In *Trije, Akira, ed. The Chinese and the Japanese: essays in political and cultural interactions*, Princeton U.P., 1980.
- 。Peasants, taxes and nationalist rule, 1937—1945, In *Symposium on the history of the Republic of China*, Taipei, 1981.
- 。Who lost China? Chiang Kai-shek testifies, *China Quarterly*, no. 88, 1981.
- 。China under Nationalist rule: two essays. *The Nanking decade, 1927—1937 and The war years, 1937—1945*, Univ. of Illinois (Illinois papers in Asian Studies, 1), 1982.
- 。New insights into the nature of the nationalist regime. *Republican China*, vol. 9, no. 2, 1984.
- 。The problem of peasant immiseration in the early twentieth century. In *Proceedings of the conference on the early history of the Republic of China, 1912—1927. Part I, August 20—22, 1983*, Taipei, Taipei, 1984.
- 。Seeds of destruction, Stanford Univ. Press, 1984.
- (4) William T. Rowe, *Journal of Asian Studies*, vol. 47, no. 4, 1988, pp. 848—9.
- (5) S. Naquin & E. S. Rawski: *Chinese Society in Eighteenth Century*, Yale Univ. Press, 1987.
- (6) 二分法思考の克服の必要とどうして、次の論文を参照して下さい。宮内紀晴「中國に於ける「人間」と「集合體」の特質」『中國研究所月報』第四四卷一號（一九九〇年一月）。

Oxford : Oxford University Press  
1988, 23cm, xiii + 263pp.